

福岡市埋蔵文化財調査報告書第466集

# 立花寺 4

— 第4次調査報告 —

1996

福岡市教育委員会

福岡市埋蔵文化財調査報告書第466集

# 立花寺 4

第4次調査報告



1996

福岡市教育委員会

## 序

福岡市は古くから大陸との対外交渉の窓口として発展してきました。このような環境のもとに多くの文化財が残されています。本市におきましてはこの保護に努めています。

本書は博多区大字立花寺における道路建設に伴い実施された埋蔵文化財発掘調査の記録です。調査の結果、多くの貴重な資料を得ることができました。学術的な調査報告書としては満足できるものではありませんが、埋蔵文化財保護のご理解に役立てば幸いです。

最後になりましたが、調査にあたり多くの方々のご理解、ご協力を賜りましたことに対し、心より感謝の意を表する次第です。

平成8年3月31日

福岡市教育委員会  
教育長 尾花 剛

## 例言

- 1 本書は福岡市教育委員会が博多区大字立花寺における道路建設に伴って調査を行った立花寺遺跡群の第4次調査報告書である。
- 2 本書に使用した方位はすべて磁北方位である。
- 3 本書に掲載した遺構、遺物の実測、製図は中村が行った。
- 4 本書に掲載した写真は中村が撮影した。
- 5 本書の執筆は中村が行った。

調査番号	9439	遺跡略号	RGG-4	調査面積	590㎡
調査地	博多区立花寺谷頭559-3～松尾谷66-1				
調査期間	平成5年9月5日～平成5年10月27日				

## 本文目次

I	はじめに	1
1	調査にいたる経過	1
2	発掘調査の組織	1
II	位置と環境	2
1	位置と環境	2
2	これまでの調査	2
III	調査の記録	2
1	調査の概要	2
2	掘立柱建物	5
3	土坑	5
4	出土遺物	5
5	おわりに	10

# I はじめに

## 1 調査にいたる経過

平成6年4月13日、博多区土木農林部土木農林課より福岡市教育委員会埋蔵文化財課に博多区大字立花寺谷頭559-3～立花寺松尾谷66-1における道路建設のための埋蔵文化財事前審査願いが提出された。これを受けた埋蔵文化財課では、申請地が立花寺遺跡群の範囲内であることから平成6年5月13日に試掘調査を行った。その結果、Ⅰ区とⅡ区（本調査時に北より、便宜上Ⅰ区、Ⅱ区、Ⅲ区とした。）に設定したトレンチでピット等の遺構が確認された。その成果をもとに協議を重ねたが現状での保存、設計変更は不可能という結論になり、記録保存のための発掘調査をおこなうこととなった。また、Ⅲ区については試掘調査時に立ち入ることができなかったため本調査期間内に試掘を行い、調査範囲を確定することになった。その結果Ⅲ区においてもピット等の遺構が確認され工事対象地のほぼ全域が調査対象地となった。発掘調査は本来、第2係の担当であったが、他の調査日程上調整がつかず不可能であったため第1係が担当し、平成6年9月5日より開始し、平成6年10月27日に無事終了した。

最後になりましたが、発掘調査を行うにあたり、博多区土木農林課をはじめ、関係者の方々には多大なご協力をいただいた。記して感謝いたします。

## 2 発掘調査の組織

調査委託	博多区土木農林部土木農林課
調査主体	福岡市教育委員会
調査総括	文化財部 部長 後藤直 埋蔵文化財課 課長 折尾学（前任） 荒巻輝勝 第1係長 横山邦継 第2係長 山崎純男（前任）
調査庶務	入江幸男
事前審査	濱石哲也 長家伸
調査担当	中村啓太郎
調査作業	小林義徳 高木啓太 羽岡政春 平井武夫 別府俊美 松永正義 松若敏美 石谷香代子 加集和子 兼田ミヨ子 高手与志子 寺嶋道子 中澤久美 野口リュウ子 水田ミヨ子 山本良子
整理作業	古場いずみ 柴藤理恵 鶴田葉子 中山穂子 楳崎多佳子 松下節子
調査協力	白井克也

## II 位置と環境

### 1 位置と環境

立花寺遺跡群は福岡市博多区立花寺～金隈にかけて位置する南北約400m、東西約300mの弥生時代から古代を中心とする遺跡群である。遺跡群は四王寺山から北西方向に低くなりながら伸びてくる月隈丘陵の西斜面の標高20～30mの丘陵に立地している。月隈丘陵は東西斜面は開削作用が著しく丘頂部が独立丘状をなすところ、浅い鞍部によって連なる舌状の丘陵をなす地形が顕著でその頂部や斜面には多くの遺跡が存在している。

周辺の遺跡についてみてみると南に弥生時代の甕棺墓地群を中心とする金隈遺跡(2)がある。その南には影ヶ浦遺跡群(3)が存在する。北西部には19基の土壙墓群、掘立柱建物等を検出した天神森遺跡群(下月隈天神森遺跡)(4)、下月隈A遺跡群(5)、甕棺墓、土壙墓群を検出した下月隈B遺跡群(下月隈宮ノ後遺跡)(6)、上月隈遺跡群(7)が近接して位置し、離れて11基の貯蔵穴、6基の甕棺墓、石棺墓1基、石蓋土壙墓3基、13基の土壙墓群が検出された宝満尾遺跡(8)が存在する。このうち土壙墓の1基から内行花文鏡が出土している。古墳時代になると周囲の地形的環境から後群集墳が数多く存在する。北に文珠谷古墳群(9)、北東部に2基が調査された立花寺古墳群(10)、熊野古墳(11)が位置する。東に金剛山古墳群(12)、更に東に七曲古墳群(13)が位置する。東南部に観音ヶ浦古墳群(14)、更に奥に持田ヶ浦古墳群(15)の各群が展開している。南南東に10基が調査された堤ヶ浦古墳群(16)が位置する。南に2基の古墳の他、57基の貯蔵穴が調査された影ヶ浦古墳群(17)が位置する。他にも多くの遺跡が存在するが調査を待たずして消滅したものも少なくない。

### 2 これまでの調査

- 第1次調査 道路建設に伴う調査。検出遺構は溝、流路、土坑等である。遺物は縄文時代から中世までの各時期の石器、土器等が出土した。遺跡の性格を決定できる遺構は検出できなかったが古代の瓦が少量ではあるが確認されたことは注目される。
- 第2次調査 共同住宅建設に伴う調査。遺構は3面にわたって確認された。第1、2面は概ね古墳時代末期から古代で検出遺構は土坑5基、掘立柱建物5棟、溝3条、柱穴等である。第3面は古墳時代後期で検出遺構は堅穴住居6軒、掘立柱建物1棟、土坑2基、溝3条、柱穴等である。古代における建物群が倉庫群と考えられること、出土遺物に青磁、白磁、権、瓦等の一般集落から出土しないものが含まれることから、官衙あるいは豪族居館と推定されている。
- 第3次調査 専用住宅建設に伴う調査。遺構は2面で確認された。検出遺構は弥生時代中期～後期の自然流路、古墳時代後期の堅穴住居1軒、掘立柱建物1棟、土坑5基、柱穴等。中世の溜井状遺構、掘立柱建物4棟、柱穴等である。

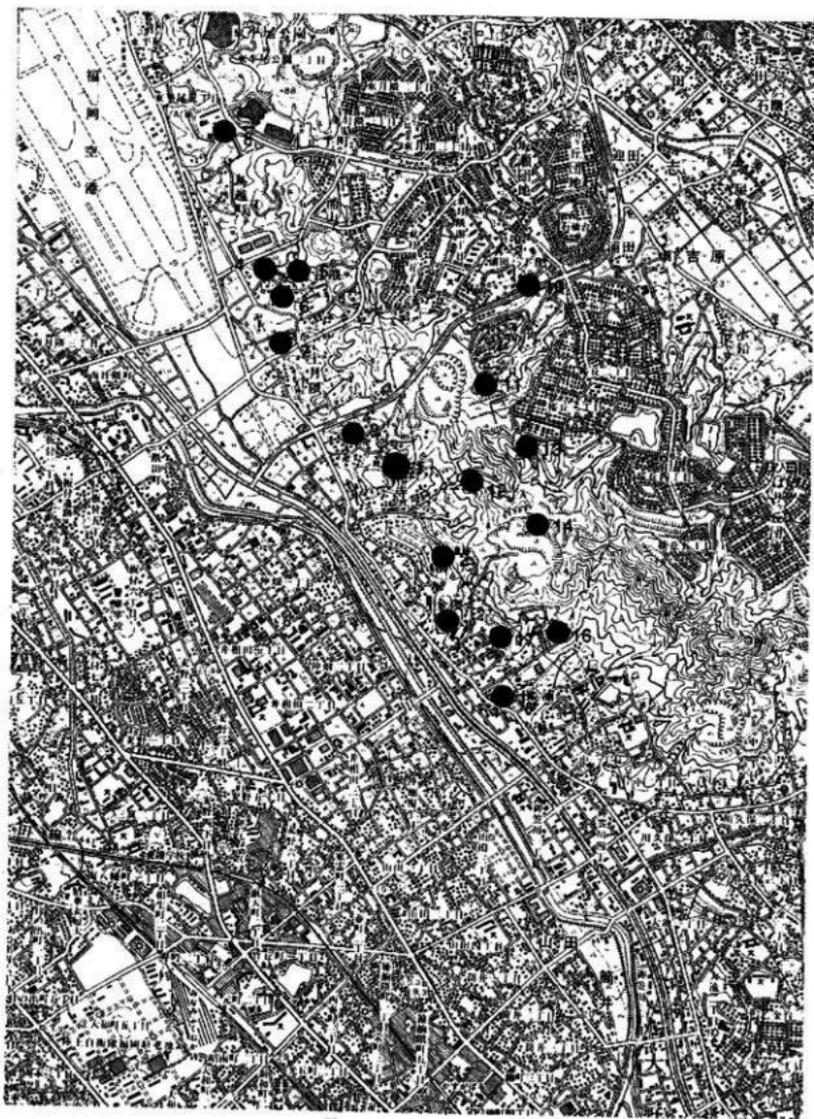


Fig.1 周辺遺跡分布図 (1/25,000)



Fig.2 立花寺遺跡調査区 (1/2,000)

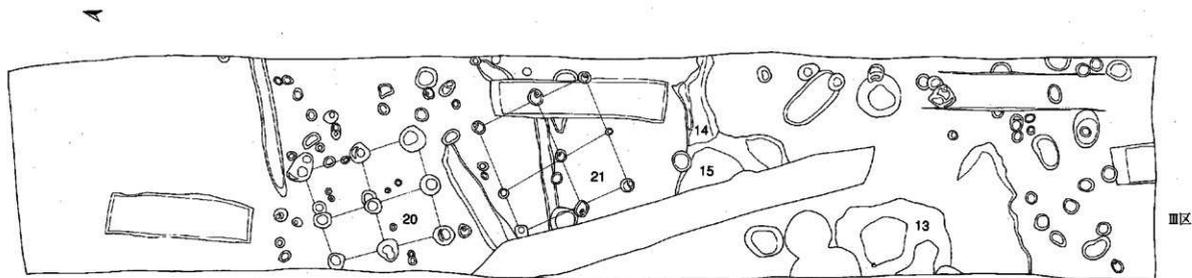
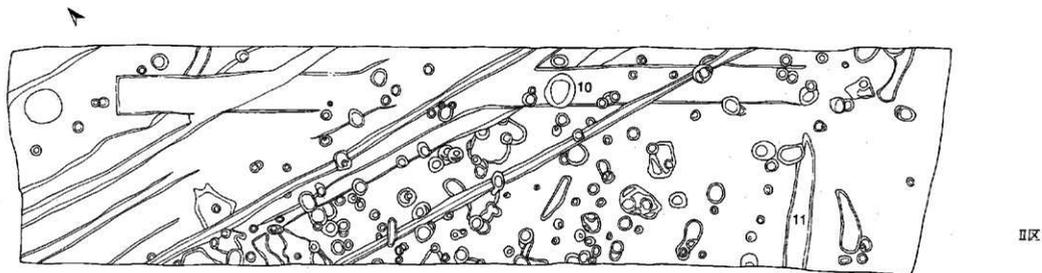
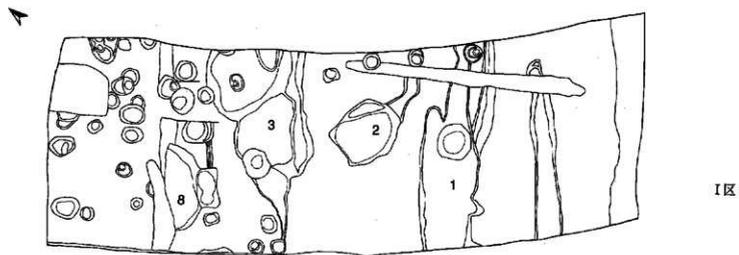


Fig.3 遺構配置図 (1/100)

# Ⅲ 調査の記録

## 1 調査の概要

調査区は南北180mにわたって位置するため、北よりⅠ区、Ⅱ区、Ⅲ区とした。調査面積は約590㎡である。遺構はⅠ区の北部とⅢ区で2面確認できたがⅠ区では2面までの掘削深が3mに達するため調査を断念した。Ⅰ区は標高20~22m、Ⅱ、Ⅲ区23.5~24.8mに位置する。

検出した遺構は溝、土坑、掘立柱建物2棟、柱穴多数等である。

## 2 掘立柱建物

### 第20号建物

Ⅲ区に位置する。2間×2間の総柱建物である。桁行3.05m、梁間2.75mを測る。各柱穴は切り合っているため建替えがあったようである。

### 第21号建物

Ⅲ区、第20号建物の南に位置する。2間×2間の総柱建物である。桁行3.25m、梁間3.1mを測る。

## 3 土坑

### 第2号土坑

Ⅰ区に位置する。北にテラスをもつ不整形の土坑である。長さ130cm、幅118cm、深さ10cmを測る。

### 第8号土坑

Ⅲ区に位置する。北部を削られるが、現状で長さ170cm、深さ30cmを測る。

### 第13号土坑

Ⅲ区に位置する。西にテラスをもつ2段掘りの土坑である。西部を削られるが、現状で長さ229cm、深さ69cmを測る。

### 第15号土坑

Ⅲ区に位置する。南にテラスをもち、西部を削られるが、現状で長さ214cm、深さ23cmを測る。

## 4 出土遺物

1~5は3号遺構出土。1は須恵器の蓋で復元口径15.6cm。調整は外面は天井部にカキメ、中位はヘラケズリ、下位はヨコナデ、内面はナデを施す。2は甕の口頸部で復元口径21.0cm。調整は内外面ともにヨコナデ。3は坏で復元受け部径15.0cm。調整は底部はヘラケズリ、他はヨコナデ。4は坏で復元受け部径15.4cm。底部をヘラケズリ、他はヨコナデ。6~10は13号土坑出土。6は蓋で器高5.2cm、口径13.6cm。天井部はカキメ、中位はヘラケズリ、他は内外面ともヨコナデ。7は蓋で器高4.4cm、口径13.1cm。天井部は未調整、上位1/3はヘラケズリ、他はヨコナデとナデを施す。天井部にはヘラ記号がある。8は蓋で器高4.1cm、復元口径14.2cm。天井部はヘラケズリ、他はヨコナデとナデを施す。9は甕で復元口径21.6cm。口頸部はヨコナデ、肩部はタタキ。焼成不良。10は高坏の脚部で脚端部径11.5cm。調整は内外面ともヨコナデ。13は14号溝、11、15~17、21は15号土坑、12、14は14、15号のどちらに帰属するか不明。11、12は蓋。11は復元口径14cm。天井部をヘラケズリ、天井内面を不整方向のナデ、他はヨコナデ。12

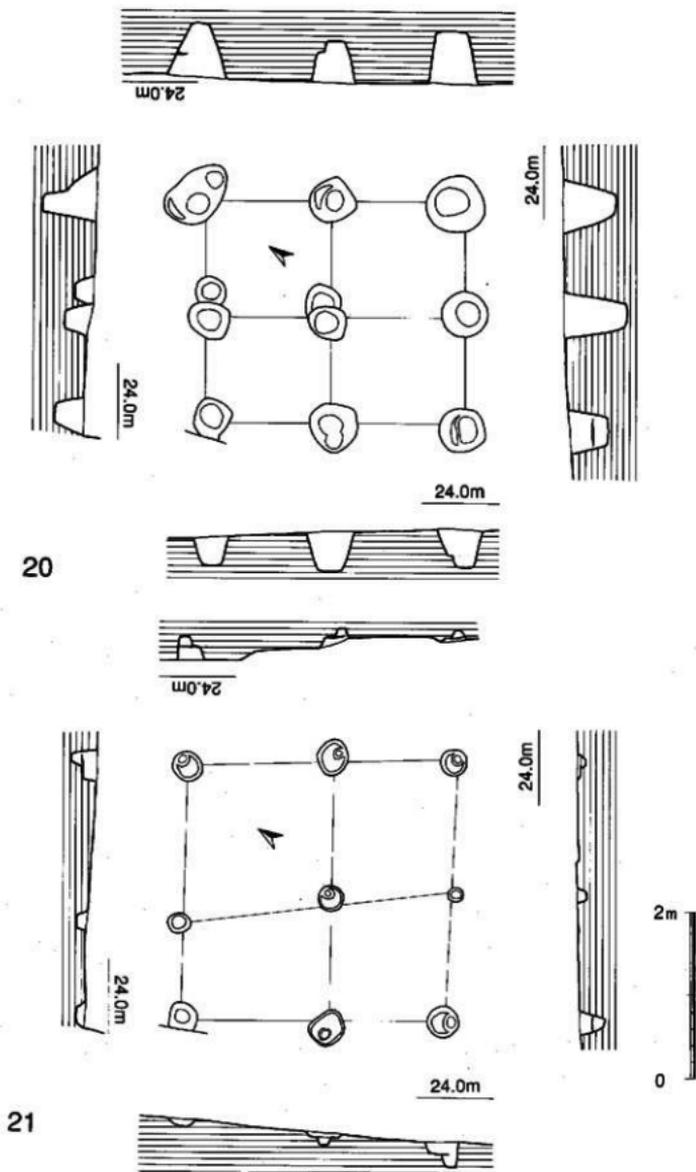


Fig.4 20·21号建物实测图 (1/60)

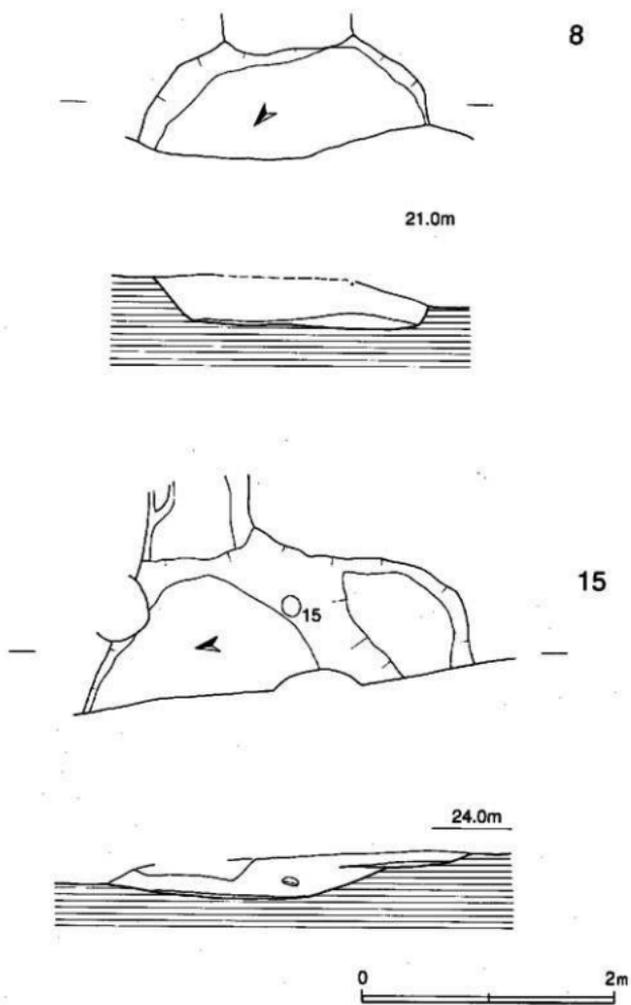
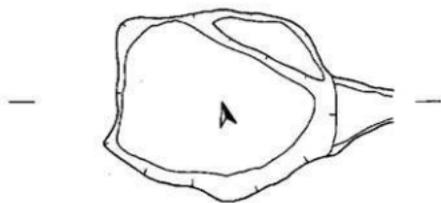
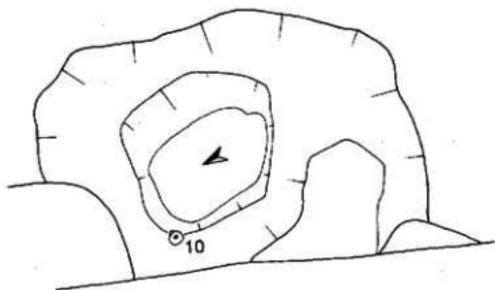


Fig.5 8·15号土坑实测图 (1/30)

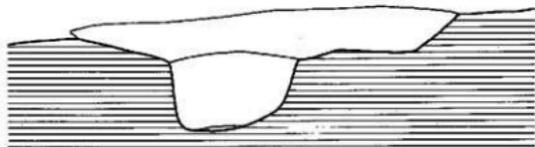


2

22.0m



13



0 2m

Fig.6 2·13号土坑尖剖面 (1/30)

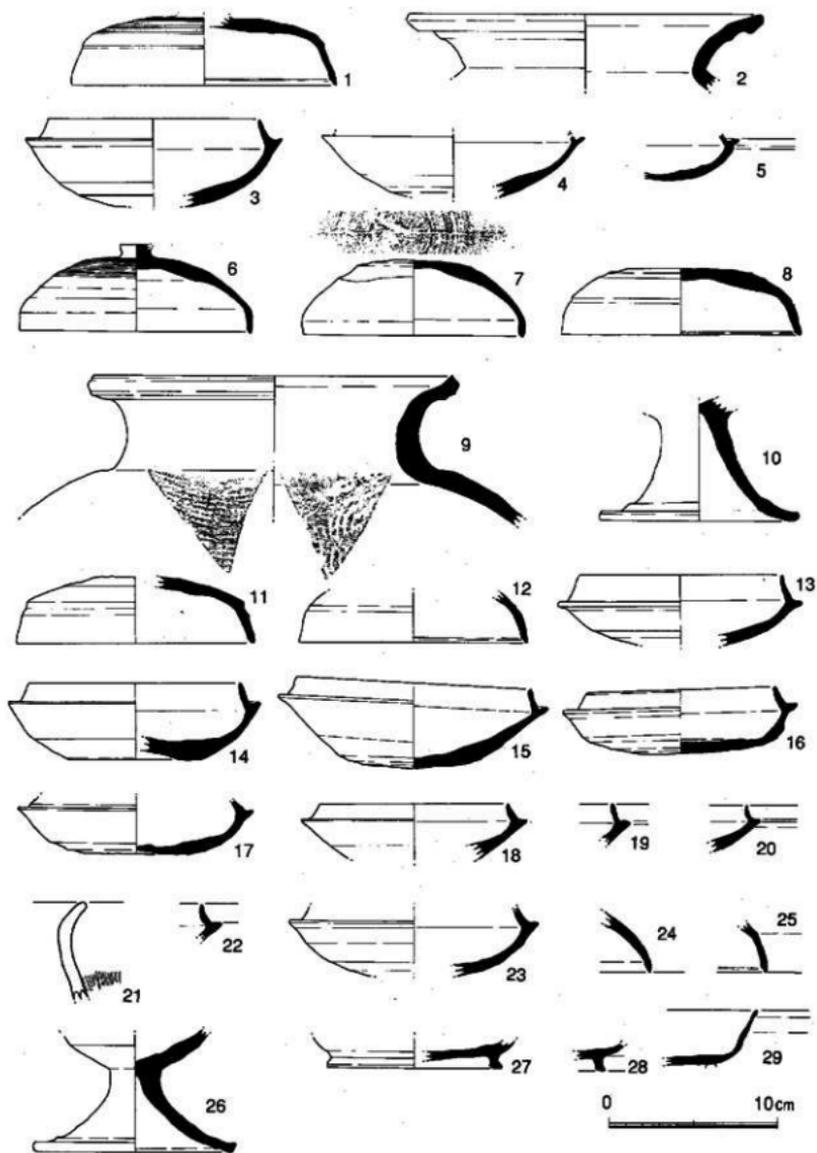


Fig.7 出土遺物実測図① (1/3)

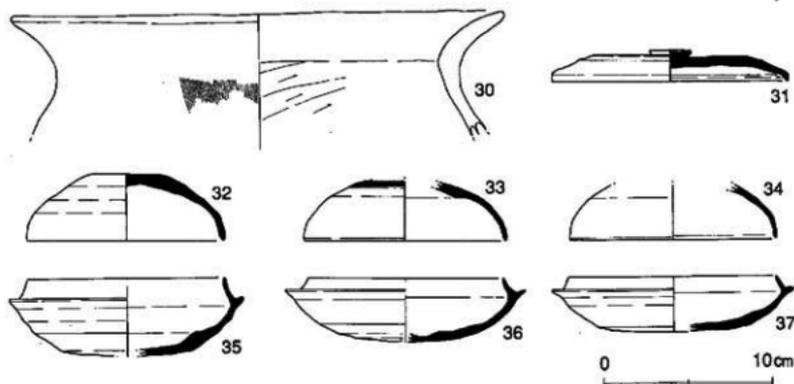


Fig.8 出土遺物実測図② (1/3)

は復元口径13.4cm。残存部分の調整は内外面ともにヨコナデ。13~17は坏で13は復元受け部径14.4cm。調整は底部はヘラケズリ、他はヨコナデ。14は器高4.6cm、復元受け部径14.8cm。外面は底部はナデ、中位はヘラケズリ、他は内外面ともにヨコナデ。15は器高5.1cm、受け部径15.9cm。外面底部は未調整、中位はヘラケズリ、他はヨコナデ。内面は底部は不整方向のナデ、他はヨコナデ。焼成不良。16は器高3.8cm、受け部径13.8cm。外面底部は未調整、中位はヘラケズリ、他は内外面ともヨコナデ。17は復元受け部径13.8cm。外面底部は未調整、中位はヘラケズリ、他はヨコナデ。内面は底部は不整方向のナデ、他はヨコナデ。21は土師器の甕で2次焼成を受ける。18~20、22、23は坏。18はP2111出土。復元受け部径13.2cm。調整は外面中位までヘラケズリ、他は内外面ともヨコナデ。19、22はP2130出土。20はP2070出土。23はP2105出土。復元受け部径14.6cm。底部外面はヘラケズリ。他はヨコナデとナデ。24、25は蓋で24はP2107、25はP2075出土。26は17号出土。高坏で真端部径11.8cm。調整は坏部外面は底部はヨコナデ、他はヘラケズリ。内面はヨコナデとナデ。脚部は内外面ともにヨコナデ。27~29は碗。27はP2136出土。復元高台径10.8cm。28はP2135、29はP2037出土。30はP10出土。土師器の甕で復元口径28.6cm。調整は口縁内外面がナデ、外面がタテハケ、内面がケズリ。31~37は試掘時及び攪乱出土。31~34は蓋。31は器高1.9cm、口径14.0cm。つまみもち、天井部はヘラケズリ、他はヨコナデ。内面は天井部内面は不整方向のナデ、他はヨコナデ。32は器高1.0cm、口径11.6cm。天井部は未調整、中位はヘラケズリ、他は内外面ともヨコナデ。33は復元口径14.0cm。天井部はカキメ、中位はヘラケズリ、他は内外面ともにヨコナデ。34は復元口径12.2cm。天井部はヘラケズリ、他は内外面ともヨコナデ。35~37は坏。35は復元受け部径13.8cm、底部はヘラケズリ、他は内外面ともにヨコナデ。36は復元口径14.0cm。底部は未調整、中位はヘラケズリ、他はヨコナデとナデ。37は器高3.3cm、復元受け部径14.2cm。底部外面はヘラケズリ、内面は不整方向のナデ、他はヨコナデ。

##### 5 おわりに

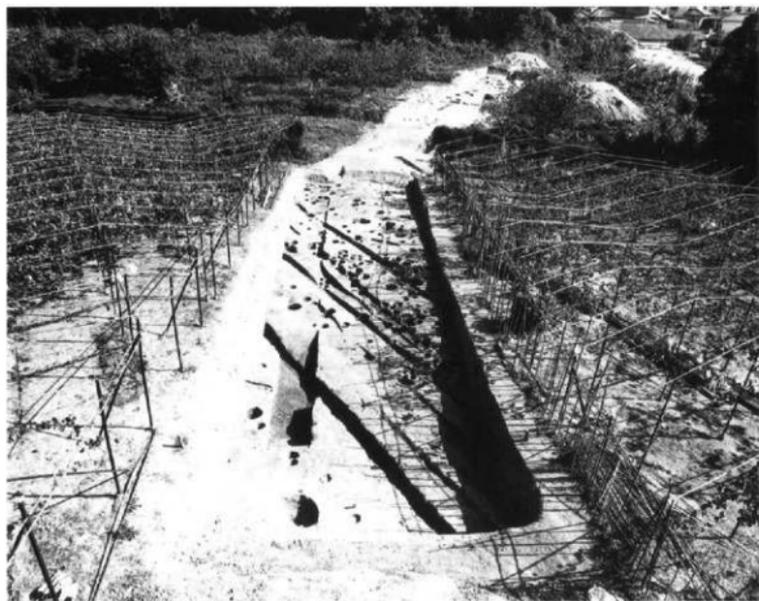
今回の調査で検出された遺構は古墳時代後期を中心とする。しかし2次調査区に最も近いⅢ区で20号、21号建物を検出したが、その他の遺構の性格については決めかねるものが多く、2次調査で推定された官衙あるいは豪族居館の可能性を積極的に追証することはできず、また2次調査区、3次調査区との関係も明言できない。本調査区はその構成から集落の一部であると考えられる。

## 图 版

I 区 全景



II 区 全景





Ⅲ区1面全景



Ⅲ区2面全景

第  
20  
号  
建  
物

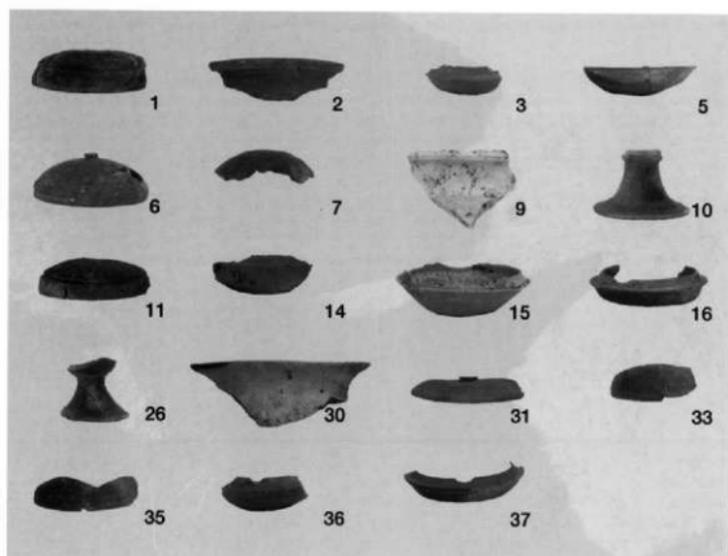


第  
13  
号  
土  
坑





第15号土坑



出土遺物

---

## 立花寺 4

福岡市埋蔵文化財調査報告書 第466集

1996年3月31日発行

発行 福岡市教育委員会  
福岡市中央区天神1-8-1  
印刷 大同印刷株式会社

---